



分析 10年史の中の『東西南北』（和光大学総合文化研究所十年誌：1995-2005）（資料と分析）

著者	鈴木 岩行, バンバン ルディアント
雑誌名	東西南北
巻	2006
ページ	370-373
発行年	2006-01-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1073/00003376/

10年史の中の『東西南北』

鈴木岩行 研究所前委員・経済経営学部教授

ハンバン・ルディアント 研究所委員・経済経営学部助教授

和光大学総合文化研究所（以下、総合文化研究所と略す）の定期刊行物である『東西南北』の変遷を紹介・分析しながら総合文化研究所の10年を振り返りたい。『東西南北』には本誌と別冊があり、本誌は1993号から2005号までの13冊、別冊は01号から04号までの4冊が発行されている。各号の詳しい内容については総目次を参照していただきたい。

「共同研究機構」の活動としての『東西南北』発行

1993号から1995号までは1995年4月に発足した総合文化研究所以前の共同研究機構における活動内容が掲載されている。これらの3冊はそれぞれ、1992年、93年、94年の秋に開催されたシンポジウムの記録を収録したものであった。1995年4月に総合文化研究所が発足した後、1995号の編集後記に当たる「編者造言」では、研究所から『研究所紀要』が発行されることを前提に、「この号をもって終巻になります」と書かれている。この号の編集をしている段階では研究所紀要として『東西南北』の名が使われることはないと考えられていたようである。

総合文化研究所紀要としての『東西南北』

総合文化研究所が創設された1995年は和光大

学創立30周年にあたり、また戦後50年でもあるため、和光大学創立30周年・総合文化研究所創設記念シンポジウムが「戦後50年を考える」をテーマに10月27日と28日の連続で開催された。1996号はこの2つのシンポジウムの記録を掲載した。総合文化研究所は発足したが、以前の『東西南北』の名称とともに、シンポジウムの報告集という性格も引き継いだためか、本号はシンポジウムの記録があるだけで、総計91ページであり、総合文化研究所紀要としての『東西南北』第1号としては寂しいものと思われる。

この1996号の発行は前号の1995号からわずか2ヵ月後のことであった。同年度に2冊刊行し、そのまま通し番号にしたので、それまで年度と一致していた号数が暦年と一致することになり、ある意味で巻号混乱のもととなっている。この一事はまた研究所の紀要あるいは年報のあり方に対する関係者それぞれの認識のズレを反映したものともしようか。

1997号には2つのシンポジウムの記録が掲載された。1つは1996年5月に開催された研究所主催の公開シンポジウム「21世紀に向けて大学のあり方を考える」、もう1つは96年11月に開催されたアジア交流フォーラムのシンポジウム「中国の近代化と人間」である。これらの他に初めて5本の論文と、14のプロジェクトチー

ムの年度活動報告（それぞれ2千字程度）が掲載された。本号から『東西南北』は現在の研究所紀要としての性格を持つようになったといえよう。ページ数は大幅に増えて170ページとなり、『東西南北』は以後このスタイル＝シンポジウムの記録、論文、プロジェクトチームの活動報告が標準となった。ただし、『東西南北』に掲載されるプロジェクトチームの年間活動報告は、前年度の活動状況が掲載されるので、2年近くも前の状況がここで初めて掲載されるという問題があった。

1998号からは上述のように、シンポジウムや講演会の記録、プロジェクトチームの研究成果としての論文、学術調査報告、それにプロジェクトチームの年度活動報告で構成されてきている。

細かい変更としては、2003号に「編集に関する申し合わせ事項」「投稿要領」を掲載したこと、また、プロジェクトの年度活動報告は2004号以後本誌に掲載することを取りやめたことがある。

プロジェクトチームの個別印刷から『東西南北』別冊発行へ

個別印刷から別冊発行への経緯

和光大学では創立以来自由な研究環境の下、そして1980年代半ば以降の共同研究推進の方針に基づいて、各教員が自発的に研究グループを組織し、研究・調査活動をおこない、その成果を自由に出版物として発行してきた。この状況に対して総合文化研究所の前身である共同研究機構は、1991年の機構発足にあたっての活動方針の中で「現行の各グループの出版物などのあり方を検討し、機構独自の会報・紀要についても検討する」とし、機構独自の紀要＝『東西南

北』を発行したが、各研究グループが自らの出版物を個別に印刷・発行することはそのまま行われた。共同研究機構発足後の92年度におけるプロジェクトチームの出版物は、『個性的教育をめざす高校・大学再訪』、『大学における授業研究 その3』、『象徴図像研究』、『パロースターン調査概報』、『アジア研究』、『生活・労働・余暇』第2号の7冊、翌93年度のプロジェクトチームの出版物は8冊を数えている。

1995年の研究所発足当初より、各プロジェクトチームがそれぞれの研究成果を個別に印刷・発行することの是非をめぐる議論が行われたが、じっさいに数多くのものが発行されていた。その一方で、初期の『東西南北』には、シンポジウムの記録のみでプロジェクトチームからの原稿は掲載されなかった。むしろ、研究所の活動とは直接関係のない個人的に依頼した原稿が数本掲載される状況が続いた。研究所委員会委員の中には『東西南北』は一般市民も読める大学の広報誌的性格を持つものであるべきで、総合文化研究所の紀要＝研究論文を掲載するものではないという意見もあったが、委員会の議論は研究所のプロジェクトチームの活動成果を載せるべきであるという方向へ集約された。そこで、『東西南北』にそれを吸収し、『東西南北』自身の中身を充実させるために、プロジェクトチームが個別に出版物を印刷・発行することを停止させることが委員会で決まった。ただし、従来からの経過もあってこの方針が完全に実施されたのは数年後からであった。個別発行を止めた結果、研究成果をまとめた形で公開することを希望するプロジェクトチームのために、別冊を発行することとなった。しかし予算措置や別冊の性格についてさまざまな議論を経た

め、別冊の発行が実現するのは2000年度になった。

研究所の印刷・製本費の予算内で、『東西南北』本誌の他に別冊の費用を工面する必要が生じたが、本誌は発行部数の割に印刷費用がかかっていた。それは装丁が凝っていることと原稿のチェック等編集業務の大半を印刷所に委託するという体制が大きな原因であったと思われる。委員会の議論を経て装丁を簡素なものにすることで費用を幾分か節約することになった。

2002年度から「重点研究」が導入され、これに選ばれたものは別冊に研究成果を発表することが半ば義務化されたが、現在は市販できるような形で出版することを目標としている。プロジェクトの研究成果は研究終了から一定の期間内に本誌に発表することが『東西南北2004』から義務づけられた。その結果、『東西南北2005』は2003年度までのプロジェクトの研究成果4本が入って、300ページを超えるものとなった。また、研究プロジェクトごとに抜刷を作ることになり、かつての個別印刷が本誌抜刷で可能となったともいえる。研究プロジェクトの個別印刷を停止したことにより、1997年から2003年ころまで一時的に研究成果の公表が停滞したかに見える。しかし、『東西南北』別冊および本誌内にプロジェクトの成果を取り込むことで、外部への情報発信は研究プロジェクトごとの発行では限界があったが、『東西南北』は多くの図書館・研究機関へと発送されるため大きく広がったと言えるだろう。web ページへの全文掲載とも相伴って、プロジェクトチームの成果公表の停滞という産みの苦しみを補ってあまりあることではなかろうか。

印刷・製本について

『東西南北』本誌の製作に費用がかかることは以下のような理由から生じていた。本誌は公開シンポジウムの記録と数本の論文を掲載して、3月20日前後の修了証書授与日に発行を間に合わせるのが通例であったが、シンポジウムは秋に行われることが多く、時には12月のこともあった。シンポジウムの録音テープから原稿を完成するのにかなりの日数がかかるため、原稿のチェックを研究所側で十分できないうちに、時間的制約から印刷所に渡さざるをえなかった。また、論文原稿の集まりが遅く、締め切り日に間に合わない原稿が多いため、やはり研究所側で原稿のチェックが不十分なうちに印刷所に渡すことも多かった。したがって、発行期日に間に合わせるために、印刷所（実際は編集作業の大部分も委託していた）に多大な編集業務を強いることとなり、それが印刷・製本費を膨張させることとなっていた。そこで、原稿提出の締め切り期日を厳守してもらい、原稿を審査し、審査を通った原稿の一次チェックを研究所の編集担当者がすることとした。さらに、印刷業者をあらためて選定し直した。見積どおりの金額で製作してもらうためにも、原稿の提出締め切りを厳守する必要があった。研究所の編集担当者の努力と原稿を執筆する所員の協力により、『東西南北2004』より印刷所に多大な編集業務を強いることが減って、出版費用の大幅削減が果たされた。

研究所 web ページの公開

1996年度に和光大学学内 LAN が設置され、運用が開始された。1997年4月の大学の web ページの開設後まもなく、研究所の web ペー

ジも同年5月に開設された。

大学がwebページを運用することの目的や意義についての学内論議と認知が当初十分であったとは思われないが、研究所としては、学内外に対する研究所活動の広報媒体として有用であることが研究所委員会で認められ、実際のページの作成、運用を研究所助手が担当することとなって、開始された。LANおよびwebページというメディアは、組織の外部に対する広報媒体という機能だけでなく、組織内での通信手段としても有用な媒体であるが、後者の機能についてはこれまでのところ十分に顧みられてはいない。

webページの開設当初はまだ試験運用の状態をさほど脱しているとはいえない段階であった。そのため大学のページ全体としてもコンテンツの量が少なく、その中で研究所は2000年代初めまで比較的多くの内容あるページを提供してきた。近年は学内各部署のページが充実してきたので、状況が変化してきているのは喜ばしいことである。

研究所のページの主な内容は、研究プロジェクトのリスト、公開シンポジウムや催し物・研究会等の開催案内、年報『東西南北』の全文情報などからなっている。これらは1997年の開設当初から変わってはいないが、その内容は年次ごとに累積しているので次第に増加してきている。

(a) 研究プロジェクトはそれぞれのプロジェクトとしての活動を報告するページを作成することが望ましいが、実際のところはこれまでプロジェクトのページを掲載してきたものは「アジアの教育」プロジェクトをはじめほんの2、3例に過ぎない。研究活動自体の遂行

もなかなか思うに任せない現状ではいたしかたのないことであろうか。

(b) 催し等の開催案内は、研究所直轄のものはもちろん、プロジェクトの会合も代表者と連絡・了解の得られたものはなるべく掲載するようにしてきている。大きなイベントを学外へ広報することはもちろん、プロジェクトの日常的な活動について所員相互が他プロジェクトの様子を知ることにも役立つと考えられる。

(c) 年報『東西南北』の全文掲載は、『東西南北1997』から始めた。当初は、テキストファイルからhtmlファイルを手作業で製作し、さらに古いものは印刷本から光学読み取り(OCR)して、その誤読を修正するという手間のかかる作業を行った。こうして遡及入力 がすべて完了したのは2002年であった。現在は印刷本の製作と同時にPDFファイル出力をおこない、これを掲載している。

この全文掲載については当初その意義を疑問視する声もあったが、現在ではe-textで論文誌・紀要などを提供する例は増え続けていて(自然科学系に比べて人文社会科学系では多くはないものの)、国立国会図書館でも2002年度から「インターネット資源選択的蓄積実験事業(WARP)・電子雑誌コレクション」を開始しており、『東西南北』もこれに登録されている。

研究所のURLは、
<http://www.wako.ac.jp/souken/> である。

(すずき いわゆき / バンバン・ルディアント)